

朝鮮半島に真の平和は訪れるのか？

李 斗熙

2017年の「水爆実験成功」に至る過程

1910年の日韓併合という植民地支配、外勢による民族の分断と民族同士の戦争、冷戦体制による対立と不安な政治状況が続いた朝鮮半島。そこで暮らしている人々にとって20世紀に一度でも真の平和があったらどうか。

その中で、2000年6月15日、平壤で行われた南北首脳会談は、その民族だけでなく、南北朝鮮の極限な軍事的対立とそれによる緊張関係におかれている周辺国にとっても、真の平和への希望の光に映ったに違いない。

しかし、それもアメリカでブッシュ政権が登場するとその流れは一気に変わった。ブッシュ政権は政権を取ると朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）との対話を中止し、ミサイル防衛構想の宣言、「悪の枢軸」発言などで前クリントン政府が推進してきた朝鮮半島政策をすべて否定し、朝鮮半島の緊張は高まっていった。これに反発した朝鮮は、2002年12月、それまで凍結していた核施設の再稼働を宣言し、いわゆる「第2次朝鮮半島核危機」が始まる。それでも韓国は金大中・盧武鉉両民主政府の期間中、南北間の交流と対話を止めず分断以来最高の関係を築いていた。しかし、また朝鮮半島の南も2008年北敵対政策を基本とする保守政権の登場で、南北の対話は閉ざされる一方、朝鮮は核武装に邁進していく。

その後も、朝鮮半島をめぐる当事者たちの対話の模索と対立は繰り返されるが、大きくはアメリカを中心とする勢力が制裁と圧迫を続け、これに反発する形で朝鮮側は核武装能力の向上に力を注いだ。その間、アメリカでは史上最悪の極右大統領が就任し、両側の暴言の応戦により緊張はますます高まり、去る2017年9月朝鮮の「水爆実験完全成功」の宣言でその対立は最高値に達していった。

解決を探るための前提は？

この朝米対立を語るとき、よく表現される「北朝鮮核危機」という言葉について考えてみたい。「北朝鮮核危機」という言葉を使ってしまうと、この危機の本質は朝鮮による核武装になる。よって朝鮮半島

危機は朝鮮が核武器の開発さえやめればそれは自然に解消されることになる。ただ、この時の「解消」はその対立にかかわっているすべての当事者にとっての解消でなければならない。しかし、この「解消」は朝鮮にとっても適用可能なことだろうか？ すなわち、朝鮮が核開発を止めれば朝鮮にとっても戦争への不安は払しょくできるのか、ということに対しても答えなければならない。

そもそも朝鮮はなぜそこまで核開発にこだわるのかについて考える必要がある。朝鮮の核開発の動きは冷戦時代にもあったようだが、やっぱりそれが本格化され国際社会の注目を浴びるようになったのは、1990年前後の冷戦の終わりとともに始まったと言って間違いはないだろう。1989年、東西の冷戦が終結し、その影響は朝鮮半島にも及ぶようになった。1991年南北の国連同時加盟を機に、韓国はそれまで理念的に対立関係であったロシア、中国との国交正常化を果たした。またほとんど同じ時期に朝鮮もアメリカ、日本との国交正常化に乗り出すようになる。しかし、これに対する朝鮮の期待は裏切られ、朝鮮半島の南北に対する国際社会のいわゆる「クロス承認」は挫折する。その結果、旧ソ連という軍事的後ろ楯を失った朝鮮は、世界最強の軍事大国であるアメリカとの国交正常化は果たせず、自らの力で自分の体制を守らざるを得ない状況になる。その手段として持ち出されたのが「核」である。すなわち、朝鮮にとって「核」は手段に過ぎない。

朝鮮はなぜ核開発にこだわるのか？

話が少し長くなったが、「北朝鮮核危機」と言ってしまうと、この「手段」に過ぎない朝鮮の核開発が問題の本質のように見えてしまう。朝鮮半島の緊張関係を緩和し、和解の道へつなぐためには、朝鮮戦争後もアメリカと対峙し続けている朝鮮の状況を理解するべきだ。朝鮮戦争でアメリカ軍による膨大な被害を受け、その後も毎年自分たちをターゲットにする大規模な米韓軍事訓練が行われ、いまだに最高指導部に対する「斬首作戦」も辞さない相手を前に、経済、軍事すべての面で劣っている国ができる対応は何かあるだろうか。圧倒的な軍事力を誇る側がそれを何一つ捨てようとせず、相手に「核を捨てる！それが平和を保障する！」と言ってもそれを素直に受け入れることは到底難しい。

私は決して核武装を認めるつもりではない。ただ、「非核」という理想論にとらわれ、おびたしい軍

事力を持って現在も世界のあらゆるところで戦争を行なっているアメリカを相手にしている朝鮮に対して「核は絶対悪だ」と押し付けるのはただの強者の論理に過ぎないのではないか。その事実を認めず、ひたすら「制裁」と「圧迫」ばかりを続けるだけでは問題の解決にはならないはずだ。実際、その結果が今日、朝鮮の「水爆実験成功」に至ってしまったのではないか。自分たちは1万ともいわれる核弾頭を保有しながら朝鮮に対しての一方的な譲歩を求めのはいかなものか。対立、特に軍事的なそれであれば、対話にあたって相手の安全保障をどういう形で示し、その相手の不安をどうやって払しょくするかを考えずには成り立たない。朝鮮にとって、「核武力の完成」はやっと自分たちがその対話の当事者としての条件を整えたにすぎない。要するに、それは戦争のためのものではなく「対話のため」であろう。だから、朝鮮は朝鮮半島の軍事対立解消の決着として、不完全な「休戦協定」から「平和協定」を一貫して主張している。そのためにはまず中国が提案している、朝鮮の核・ミサイル試験と米韓合同軍事演習を同時に暫定中断する「双中断」が現実味のある方法だと思う。それから当事者が対話のテーブルにつき、一つずつ信頼関係を築きながら完全な平和への道を探っていくしかない。その道のりはまた時間がかかり、いろんな紆余曲折が伴う展開になるだろう。

南北の和解、日本社会はどう向き合うか

去る1月1日、金正恩朝鮮労働党委員長の「新年の辞」を契機に、この10年近く閉ざされた南北関係は、対話と和解ムードへと急展開している。2月に韓国の平昌で開催される冬季オリンピックの開会式で、南北が合同入場する光景は想像するだけでも胸が熱くなる。南北当局者会談も再開され、オリンピック期間中はあのトランプ大統領さえ軍事訓練を中止することに同意した。当然、これらは物事の終わりではなく、長い綱引きの始まりであろう。それが時には揺れながらも一つの目標に向かって行くのに注目し、応援しながら、支持の声を上げていきたい。

最後に、朝鮮半島問題に決して無関係ではない日本社会が朝鮮半島で戦争が起きるとその被害が日本にも及びうることを自覚し、素直に南北の和解を支持し喜んでほしい。もし朝鮮が崩壊したとしてもそ

の混乱は日本と無関係ではない。それは中東の紛争によるヨーロッパでの難民受け入れ問題がそれを示唆している。政治にはそれが無理だとすれば、ひとり一人の市民が声を上げ、自分の平和を守るため、アジアの平和を守るため立ち上がっていただきたい。